

## 作文の授業活性化の条件

—日本国語教育学会ワークショップにおける提案を踏まえて—

田中 宏幸

キーワード：インベンション、枠組み作文、「場」の設定、文題表

### I はじめに

作文教育における〈インベンション〉の重要性と〈枠組み作文〉の可能性について目を開かせてくださったのは、小田迪夫先生である。1989年度、私は高等学校を退職し神戸大学大学院に在籍していたが、当大学院非常勤講師を兼任していらっしやった小田先生は、「説明文教材の授業改革」を論じるとともに、「寺田寅彦のインベンション<sup>(1)</sup>」を事例として取り上げ、作文教育への活かし方を教示してくださった。爾来、「インベンション」は私の研究テーマとして明確に位置づけられ、理論と実践の両面から「作文の授業づくり」に本腰を入れることになった。

本稿では、「インベンションを重視した作文指導の実現」を基本テーマとしながら、2004年夏より4年間にわたって、日本国語教育学会全国大会ワークショップ分科会において提案したことを整理し、作文の授業活性化への条件について考察したい。

### II ワークショップのあらまし

このワークショップは、日本国語教育学会事務局から、「中学・高校の教員を対象として〈作文の授業づくり〉の具体的提案を行うように」と依頼されて、実現したものである。

各年度に取り上げたテーマは、以下のとおりである。

- (1) 2004年度「論理的な文章表現—範文の発想と論理を文章創造に生かす〈枠組み作文〉—」
- (2) 2005年度「表現意欲を喚起する作文指導—インタビューをもとに人物紹介文を書く—」
- (3) 2006年度「意見文作文の授業づくり—意見作りから組み立てまで—」
- (4) 2007年度「意見文作文の授業づくり—他者理解を踏まえた自己表現—」

#### 1 2004年度「論理的な文章表現（中・高）」

2004年度は、教科書教材を活用した作文の授業づくりを提案した。教材（範文）の発想法と文章展開を司っている「言い回し」（これを「枠組み表現」と名づける）を抽出し、その「枠組み表現」を活用することによって、各自の文章創造を導き出すのである。

この年度は、①寺田寅彦の随筆「柿の種」（「存外不便なもの」）、②田村隆一の詩「木」、③黒

田三郎の詩「ある日ある時」を題材として用いた。これらは、いずれも既に発表済みの指導法であるから、ここでは指導のポイントだけを記しておく。

①は、「東京という所も存外不便な所である」という主題文の副助詞「も」と副詞「存外」が特徴的である。この「枠組み表現」を用いながら、日常生活において発見した意外なことについて、400字程度の短文を書かせるのである。<sup>(2)</sup>

②は、「木」に対する一般的な評価理由と作者独自の評価理由の対比、及び「ほんとうにそうか／ほんとうにそうなのか」と自問自答する構成に特色がある。この「枠組み表現」を用いて、自分の最も愛するものについて、愛する理由を明らかにした詩を書かせるのである。<sup>(3)</sup>

③は、「秋の空が青く美しい」というだけで、負の存在だと考えていた「噴水の水」や「落葉」にも喜びを見出すことができるという価値観の転換を歌い上げた詩である。この詩の「枠組み表現」となっている副助詞「だけ」「も」「さえ」を使いながら、身近な三つの事物を比較し、自分の見つけた「いいこと」を読者に伝える詩を書かせるのである。<sup>(4)</sup>

いずれも、日常生活を新たな目でとらえ直し、「独自の価値を発見」するように導くことに主たるねらいがある。しかも、範文における「論の展開の仕方」をおのずから身に付けるように導くことをもねらっている。

ワークショップに与えられた時間は180分である。中・高校の教室では、ほぼ4時間扱いの指導内容となる。〈趣旨の理解〉→〈実作〉→〈相互交流〉の三段階を盛り込むにはやや時間不足であるが、約50名の参加者（中・高校教員、大学院生、教科書編集担当者等）の協力を得て、楽しい作品を数多く生み出すことができた。参加者からは、生徒たちが「書く材料」を発見するヒントとして有効であり、「書き方」も明確なので達成感が得やすい、という感想を得ることができた。

## 2 2005年度「表現意欲を喚起する作文指導（中・高）」

2005年度は、「話すこと・聞くこと」との関連指導として位置づけられる作文の授業づくりを提案した。インタビューによる取材を踏まえて、人物紹介記事を書くという学習である。

ワークショップの進行については、次のようにプランニングした。

- ① 人物紹介記事（新聞記事）の構成について分析。（到達目標のイメージ化）
- ② インタビュー実施上の留意点を理解する。（相手の回答の中から次の質問を見つけ出す。「なぜ」「どのように」を中心に詳しく訊き、傾聴する態度で相手の思いに迫る。）
- ③ 初対面の人とペアを組み、相互にインタビューを行う。（主題「私の熱中していること」）
- ④ インタビューによる取材内容をもとに、600字以内の紹介記事文に仕上げる。
- ⑤ 紹介記事文を読みあい、相互鑑賞と反省会を行なう。

学習材には、朝日新聞「ひと」欄（2005. 6. 23）を用いた。旅客機のパイロット資格を自力で取得した小林郁子さんという女性を紹介した記事である。この文章は、形式的には9段落で構成

されているが、意味内容からは三段落構成になっている。即ち、第1～2段落：女性パイロットの誕生（現在）、第3～7段落：パイロットになるまでの経緯（過去）、第8～9段落：今後の決意（未来）、である。

この記事に限らず、人物を紹介する際には、〈現在〉→〈過去〉→〈未来〉の順に述べると、おのずからその人のドラマを語ることになる。「現在→過去」という展開が、原因究明の思考を導き出すのである。

この学習は、取材段階においては、生きた人間を相手にしたコミュニケーション能力が鍛えられる。構成・記述段階においては、見出しを付けることによって要点を明示する力や、話し言葉を書き言葉に書き換えながら内容を整理していく力がつく。総合的な学習として活用しやすい方法である。

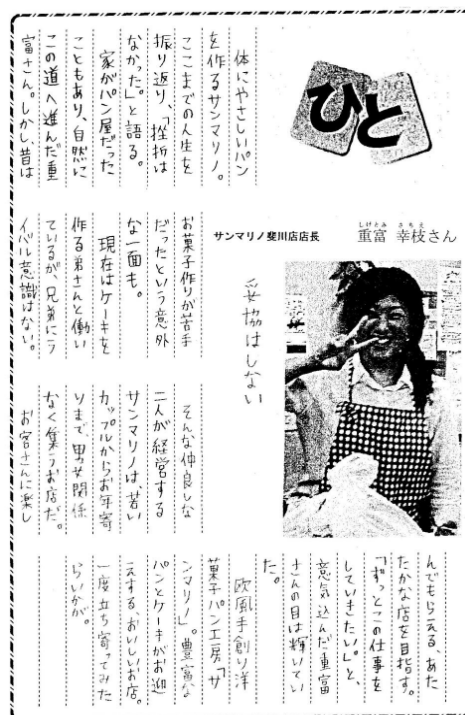
ワークショップでは、次のような作品が生まれた。

<p><u>国語の先生が井戸を掘る</u></p>	<p>あわいはら 栗井原律子さん</p>
<p>上総掘りは、伝統的な井戸掘り技術の一つ。竹と鉄パイプを使って二、三百メートルまでは掘り下げることができる。手掘りである。</p> <p>栗井原先生は、その技術を使ってビオトープづくりや湧水地の水の供給にいとむ。</p> <p>本職は国語の先生なのだが、実践のきっかけは、「悲劇のルアンダ希望の義足」(プロジェクトX)にある。これに勤務校の藤沢西高の卒業生吉田真美さんが登場し、その後、学校との密接なつながりが</p>	<p>生じたからである。顧問をしているJRCも先輩に協力する。</p> <p>民族対立によって、多くの罪もない人々が、手足を奪われた悲劇のルアンダ。わき起こる困難な状況にもめげず、義足を提供しつづける。希望を失うことはない。——卒業生のこの意思と行動にうたれて、栗井原先生も思い立った。自分の何か行動で支援できることはないか。上総掘りがある。</p> <p>できれば、海外支援もと、夢はふくらむ。(中)</p>

この方法はその後、参加者の高校において実践された。地域の職業人を招いてインタビューを行い、記事にまとめるのである。担当した木村あや教諭によれば、生徒たちの学習意欲の高さに感動したとのことであった。

このように、インタビューは、日常では為手の側に立つことも受け手の側に立つこともほとんど経験することがないから、生徒たちには新鮮な活動として受けとめられ、適度な緊張感と期待感を引き出すことができる。

しかも、「現在→過去→未来」という文章構成が、文章全体を見通した「想」の形成を促し、表現意欲を高めていく。さらに、具体的な読者を想定することで文章表現がいつそう吟味されるとともに、書き上げた記事を読み合うことによって交流の喜びを味わうのである。



島根県立横田高校の生徒作品

### 3 2006年度「意見文作文の授業づくり」

2006年度は、授業づくりで最も頭を悩ませる「作文題（テーマ）の設定」を実践課題として取り上げた。また、共通テーマとして応用しやすい「私の流儀」を想定して、複数の作品例を比較することによって「枠組み表現」を抽出する方法と、「回し読み」方式（10名の読者が自分を基準としてA・B・Cの三段階で評価し、最後の評者がコメントを書き添える）による相互評価の方法<sup>(5)</sup>を提案した。

#### (1) ワークショップの進行計画と学習材

ワークショップの進行については、次のようにプランニングした。

- ① 中学生・高校生に書かせてみたいテーマを10題、具体的な作文題の形で各自が書き上げる。
- ② どのような作文題が効果的かについて、グループで話し合い、お褒めの題を発表しあう。
- ③ 「私の流儀」というテーマにふさわしい範文と生徒作品例を比較し「枠組み表現」を抽出する。
- ④ 「枠組み表現」を利用しながら、意見文「私の流儀」（600字）を書く。（記述時間30分）
- ⑤ 相互鑑賞（回し読み方式）と反省会。（学びの共有）

学習材には、①森毅の随筆「雑木林の小道—ふらふら—」と、②高校生の作品例「僕の流儀—さらさら—」<sup>(6)</sup>を用いた。

①は、「道を決めないで〈ふらふら〉進む」という自分の流儀は「いい加減な生き方」のように見えるが、その心意気の深層には「白紙の未来に立ち向かう実存的存在」という意味があるのだと居直って見せたユーモラスなエッセイである。文章構成においても、苦手談によって読者を惹きつけておいた上で、自分の流儀を擬態語化して示し、さらに想定される悪い評価に対して反論するという、譲歩型の論理展開法を用いている。一方、②は、リーダとなって人に指示するのが苦手だと感じている高校生が、森毅のエッセイの「枠組み表現」を用いて、「目立たないように〈さらさら〉と生きたい」という自分の流儀を語った文章である。作者名を伏せたまま、この二作品を提示し、共通する「枠組み表現」を抽出するのである。

#### (2) ワークショップの収穫1——文題例

「文題例」の考案については、興味深いものが次々と挙げられた。それらを題材や文体を基準として整理すると、次頁の表のように11種に分けられる。

整理基準は、①自己から他者（家族・友人／学校／地域社会）へという個人を核とした領域の発展性、②人文・社会・自然という科学領域の広がり、③フィクション・ノンフィクションという文体上の異なり、の三つである。

なお、この文題例集においては、その文題の表現の仕方（提示方法）にも工夫が凝らされていることに注目したい。問いかけ型、二項対比型、焦点化型、条件設定型、立場転換型など、視点の明確化を迫るものが多い。

生徒の表現意欲を喚起するには、このように生徒の実態や季節・学校暦に即して適切な題材（素材）を選択するとともに、提示方法の面からも工夫を重ねていくことが求められるのである。

分野		文題例	
個を中心とした広がり	自己 心	○私にとって大切なもの ○自分を色に例えると ○私を漢字一字で表すと ○私をコンビニの商品に例えると ○自分で自分をほめたいと思ったこと	○今までで一番うれしかったこと ○今までで一番恥ずかしかったこと ○10年前の私、10年後の私 ○家族から見た私、友達から見た私 ○私の一番の宝物
	家族 友人	○家族の肖像—うちのママは○○だ— ○我が家の常識・世間の非常識 ○家族（ペットを含む）への感謝状	○友人に勧めたい本 ○友だちから学ぶこと ○友だちの作り方
	学校 教育	○英語の学習は小学校から必要か ○土曜日は授業がある方がよい（是か非か） ○夏休みの宿題は中学生にとって必要か ○定期テストをなくしたら ○中学生に携帯電話は必要か ○いじめの背後にあるもの	○給食か弁当か ○学校に冷房は必要か ○茶髪の是非 ○高校生の化粧について ○「○○」という科目はなぜ必要か ○図書館に漫画をおくべきか
	地域 社会	○電車の中でのマナー（飲食・座り込み） ○「あっ」（今、気づいたこと） ○この町に住む偉人、この町にある宝物	○私の町をどんな町にしたいか ○旅の思い出—おすすめの町— ○通学時に見えるもの
科学領域の広がり	人生 仕事 哲学	○何のために大学（高校）に行くのか ○お金と時間とどちらが大切か ○どの人生に共感を覚えるか（伝記の読後）	○私の将来—私の考える家庭と仕事 ○これからの人生設計図 ○こんな大人になりたくない
	福祉 健康 生命	○食生活で改善したいこと ○ダイエットは必要か ○私のボランティア体験	○身の回りのバリアフリー ○重症患者への薬投与を中止すべきか否か（「国境なき医師団」の苦渋の決断を読んで）
	政治 経済	○NHK受信料の未払いについて ○夫婦別姓について ○20歳が成人にふさわしいか	○国際紛争と平和 ○総理大臣の立場で～を考える ○学歴社会は是か非か
	国際 文化	○初めて来日した外国人をどこに案内するか ○私の体験したカルチャーショック	○なぜ「お笑い」がはやるのか ○本当の国際人とは何か
	言語 情報 自然 環境	○インターネットの光と影 ○喧嘩した友達に謝るときはメールか手紙か ○ゴミの分別、私ならどうするか ○ゴミのポイ捨てと清掃活動 ○食べ物を残すということ	○人を励ます言葉、ダメにする言葉 ○身の回りの略語・メール語 ○割り箸を使うことは罪悪か ○地球温暖化と私の生活 ○地球滅亡から逃れるには
虚構 空想	○「どこでもドア」が手に入ったら ○無人島に行くしかないと分かったら ○余命一週間と宣告されたなら	○死ぬまでにしたい五つのこと ○もし一本の鉛筆と一枚の紙しかなかったら ○大きなホラを吹くとしたら	

### (3) ワークショップの収穫2——作品例

「枠組み表現」の抽出と活用、及び評価については、作品例「にんまり」を挙げておこう。相互評価において10名の評者全員からA評価を受けたものである。(下線部が「枠組み表現」)

愛想笑いが苦手だ。つまらないと思うとそのまま顔に出てしまう。一方、おもしろいと思った時は、そのことに夢中になるので表情がこわばってしまう。結果、周りの人から怖いと言われてしまう。

だから、なるべく意識して笑うようにしている。家族や生徒にも「心に地球を。唇に微笑みを」が私のモットーだと宣言してある。怖い顔をしていたら教えてもらうためだ。

それで、「にんまり」というのが私の流儀である。「にこにこ」ではなく「にんまり」というのは、下心があるように見られやすい。気味が悪いと思う人もいるだろう。

しかし、ちょっと言わせてもらえば、「にんまり」というのは老化防止も兼ねた妙案なのだ。人の表情は顔の筋肉で作られているので、若々しい顔でいるためには、顔の筋トレも必要だと何かで読んだことがある。そこで、「にんまり」と笑った表情を保ったままいる時間を増やすことにしたのだ。

もっとも「にんまり」するのは、一人でいる時や、誰もいない道を歩いているときだけに限ることになっている。もし、突然横道から誰か出てきて、そういう時の私を見たら、ギョッとすることもかもしれない。

それでも私は、「にんまり」がいいと思う。トレーニングの成果がそのうち表れて、笑いに敏感な筋肉ができあがり、いつも若々しく和らいだ表情になれると信じている。皺ができるとしても、きっと笑い皺が一番深くなるに違いない。笑い皺が刻み込まれた顔というのもちょっといいな、なんて思っている。(佐)

### (4) 「枠組み作文」の留意点

ところで、「枠組み作文」は、いわば「両刃の剣」でもあることに留意する必要がある。大多数の生徒にとっては、「形」を活用することによって取材と選材が活発に行われ、筋の通った文章が書きやすくなるという効果をもたらすが、一部の生徒にとっては、「形」を使うことが目的化してしまい、かえって拘束感を与えてしまうという逆作用を及ぼす恐れがある。特に、読書量の少ない生徒や、論理展開法に関する学習経験の乏しい生徒にその傾向が強い。大事なことは「想」の展開を容易にすることであって、「接続語句」や「副詞」を使いこなすことが目的ではないことに重々配慮する必要がある。

また、「枠組み表現」を抽出する際に、生徒自らが「枠組み」を発見するという過程をないがしろにしないように留意したい。実績のある「範文」を幾度も用いていると、一度抽出した「枠組み表現」が絶対化してしまい、その「形」を与えることに力を注ぐということになりやすい。

「形」に隷属するのではなく、「形」を利用することで「想」の定形化を図るのである。そのためにも、範文の分析段階から生徒が参加する学習形態を重視したい。例えば、類比関係にある二つの文章(範文と生徒作品)を読み比べて、共通する「形」を発見させるという手順を踏むことによって、思考の展開にも目が向くように導くのである。

## 4 2007年度「意見文作文の授業づくり」(中・高等学校)

2007年度は、「意見づくり」を実践課題として、「情報格差の自覚」<sup>(7)</sup>や「着想の拡充」を促す

方法を解明することに重点を置いた。「論理展開の型」については、「枠組み作文」を用いず、「思考パターン」と「典型的な接続表現」を概念的に示すに止めることにした。

(1) ワークショップの進行計画と学習材

ワークショップの進行については、次のようにプランニングした。

- ① 5～6名ごとで一班を編制し、エクササイズ「権利の熱気球」に取り組む。
- ② 班ごとにプレゼンテーションを行う。(他のグループの考え方を知る。)
- ③ 文章化する際の思考パターンと典型的な接続表現を理解する。
- ④ 「私が最も大切にしたい権利」をキーワードとしてマッピングする。
- ⑤ 「私が最も大切にしたい権利は〇〇である」を書き出し文として、頭括型の意見文を書く。
- ⑥ 意見文(400字)を読みあい、コメントを書く。(相互鑑賞会)

(8)  
 学習材として用いた「権利の熱気球」は、構成的グループエンカウンターによる相互理解のためのエクササイズである。「ホンネを表現し合い、それを互いに認め合う体験」を通して、自分や他者への気づきを深めさせ、「人とともに生きる喜びや、わが道を力強く歩む勇氣」を獲得させる手法として活用されている。現代の中・高校生は、他者とつながることを強く願いながらも、教室の中で真剣に話し合うことが少ない。こうした人間関係の希薄化を改善するのに実績を上げている教育相談のエクササイズは、作文の授業づくりに生かすことができる。お互いの情報や意見にギャップがあることを自覚させることを通して、価値観を明確化させ、文章化につなげさせていくのである。

『権利の熱気球』カード — 私たちの「権利」リスト(捨てていく順序) —

順位		権 利	班グループ				
自分	班						
		自分だけの部屋を持つ権利					
		きれいな空気を吸う権利					
		正直な意見が言え、それを聞いてもらえる権利					
		お小遣いをもらう権利					
		いじめられたり、命令服従を強制されない権利					
		遊べる、休養できる権利					
		愛し、愛される権利					
		毎日、十分な食べ物ときれいな水を与えられる権利					
		皆と異なっている、違っていることが認められる権利					
		毎年、旅行をして休暇を楽しむ権利					

- \*今、班の全員が、同じ熱気球に乗っていて、トラブルが起こり、高度が下がっている。  
 要らないものから捨てていかなければならなくなった。その順番を決めてください。
- \*多数決で決めないこと。少数意見を大事にして、理由を聞き、皆の合意で決定すること。

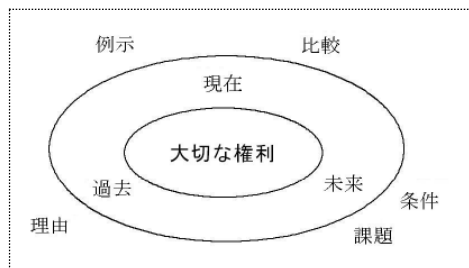
文章構成については、「頭括型」(書き上げた結果として「双括型」になってもかまわない)を用いることとする。そのモデルとして、「私が最も大切にしたい権利は〇〇である」という書き出し例<sup>(9)</sup>を与える。さらに、それに続く接続語句例として、次表の五類型を示す。

ただし、今回のパターンでは、譲歩（「なるほど…かもしれない。しかし…」）や、帰結（「だから」「したがって」）の構文は省略している。結論を述べた直後に、譲歩や帰結の構文を用いることはない判断したからである。

① 定義・例示：「つまり…」 「例えば…」	④ 原因・理由：「なぜなら…」
② 分析・分類：「第一に…、第二に…」	⑤ 付加・累加：「そのためには…」 「さらに…」 「しかも…」
③ 比較・対照：「これに対して…」 「しかし…」 「とはいうものの」 「むしろ…」	

これらの接続語句は、次のような文章展開パターンを導き出す。①②③は、「その権利とは何か」という問いを立て、権利の内容を詳しく説明・解説するパターン。④は、「その権利がなぜ大切か」という問いを立て、根拠や理由を詳述するパターン。⑤は、「その権利を守る（実現するにはどうすればよいか）」という問いを立て、その条件・課題・方策を論じるパターン。つまり、「何か」「なぜか」「どうするか」の三つの問いを基本に思考を発展させていくのである。

この五つの型を時間軸で分類すれば、①～③は「現在」、④は「過去」、⑤は「未来」と位置づけることもできる。400字という限られた字数では、どこかに絞って書くべきであるが、1000字程度書くことが許される場合は、前述したように、「現在→過去→未来」という順に述べていけば、比較的簡単に意見文を書き上げることができる。



## (2) ワークショップの収穫

今回、得られた作品例を二つ挙げる。作品例1は、話し合い過程における心の変化が、「現在→過去→未来」の順に素直に綴られた作品である。結果的に双括型の文章構成となっている。

作品例2は、社会のあるべき姿を論じた作品である。題名と書き出しにおいて主張が明確に示されている。その根拠となるのは、一言一言に重みの感じられる筆者の戦争体験である。過去の体験を冷静に捉えているが故に、未来への提言も力強い。

### 【作品例1】人間を輝かせる権利

私の最も大切にしたい権利は、愛し愛される権利である。

とは言うものの、実は私は最初はきれいな水と食料が一番大切だと思っていた。なぜなら、生きる為に水と食料は必須だし、私の生まれ育ってきた中で、汚い飲料水や飢えは全く無縁のものだったからである。そんなことには耐えられないし、それなりの食物が保証されて初めて愛が成り立つと思った。

しかし、色々な人から、シベリア抑留時のエピソードや、阪神大震災での体験談を聞く中で、どんなに食料が乏しくても、人間同士の信頼関係が堅ければ強いほど強くなれるということを知った。これは意外な事実であった。やはり人間って素晴らしいなと思える事実であった。私も極限の事態に直面したときに、食物にしがみついている人間よりは、人と励まし合いたい。

だから、私の最も大切にしたい権利は、愛し愛される権利である。(美)



【作品例2】 違いを認めあえる社会に

違っていることが認められる権利を大切にしたい。

戦後六十二年の現在、人々は自由な服装を楽しみ、多様な趣味を楽しんで、個性の違いを競い合っているかに見える。しかし一方で、ものの考え方の画一化が進んではないか。異装の人が疎外されてはいないか。

私の育った二十世紀前半の日本では、服装は国民服・モンペ。英米文学書などを手にすれば「非国民」と密告された。正義の戦争に勝利することを疑ってはならなかった。

この偏狭な時代を再来させてはならない。さまざまな立場・境遇・思想信条の人々が、自由にその思いを表明し、理解し、共生し合う社会であってほしい。

そのために大事なものは、教育であり、マスコミのありようである。事実を正しく広く知り筋道立てて考え表明する力を育てる教育と、さまざまな立場から発信されるマスコミコミュニケーションの力に期待したい。(百)

(3) 「接続表現例」提示の留意点

エクササイズについては、27名の参加者全員から「楽しく、ためになった。」「価値観を話し合うことによって話が深まった。」という声があがり、意見づくりの契機として効果的だという評価が得られた。だが、実際の教室においては、話し合いを深めるための支援が必要であろう。多数決や論破という方法ではなく、対立と共感を重ねながら合意（コンセンサス）を形成していく話し合いの指導は、まだ定着していない。日常の生徒指導との関連も必要である。

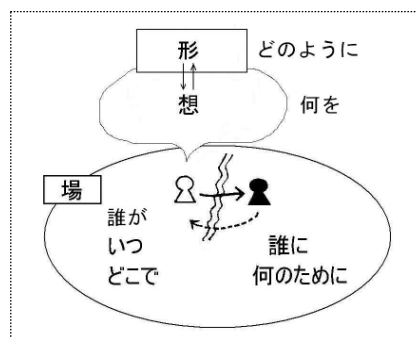
「接続表現例」については、これを直接用いた文章例は半数程度にとどまった。しかしこれは、ワークショップ参加者の高い文章表現力がもたらした現象であろう。一方、「現在→過去→未来」という展開法は、ほぼ全員に活用されていた。

ワークショップの翌日、ある参加者は、「意見文を書くための具体的な処方箋が示されたので、これならば国語科が実技の時間になると思いました。自己開示のきっかけ作り。日本語の一文の平均文字数。『現在、過去、未来』と書き進めていく一つの型の意味。接続詞の使い方の解説。これらを、このメールを書くときにも意識しながら使ってみました。」という感想をメールで届けてくれた。この文面にある「具体的な処方箋」に注目したい。書けない生徒の悩みを解決するには、論の展開が見通せるような具体的手立てを示すことが欠かせないのである。

Ⅲ 作文の授業活性化の条件

以上4回のワークショップを踏まえて、作文の授業活性化の条件について整理しよう。

第一の条件は、「場の設定」である。五十嵐力は、文章を書く際には、「何時」「何処にて」「何人が何人に対して」「何を」「何故に」「何如にして」の六項目を明確にすべきだと説いた（六何説）<sup>(10)</sup>。これは、作文課題を提示する際にも、右図のような「文章表現の場の要素」の有無を点検すべきだ、と



【文章表現の場の要素】

読み替えることができる。なかでも、相手や目的を明確にすることが重要である。相手や目的が明らかになれば、自分の立つべき位置や視点も定まり、「何を」「どのように」書くかという方向性も見えてくる。

第二の条件は、書く意欲を喚起する「課題の選定」である。作文の授業が単なる言語技術の習得に終始するならば、生徒たちの表現意欲をひきだすことはできない。生活感・必要感・切実感のある課題を選定し、本気で書こうとする気持ちを育てる必要がある。その具体的方法として「文題表」がある。これらを活用し、提示の仕方にも配慮して、「想」の明確化を図り、独自性のある意見が述べやすくなるようにしたい。問題の焦点化、立場の選択、他者との情報格差の自覚を促す課題が、書きたいという気持ちを高めていくのである。

第三の条件は、「書き方の習得」に対する支援である。生徒たちが最初から明確な「想」を持っていると期待してはならない。書きたいことはあるが、漠然としているというのが現状である。その状態で苦しんでいる時に、いくつかの文章展開モデルを与えてやると、「問い」が明確となり、「漠想」が「分化想」「統合想」に転化しやすくなる。<sup>(11)</sup>この具体的方法が、「枠組み表現」「書き出しモデル」「接続語句」の提示である。「形」を知ることによって、文章の進め方に見通しが持てるようになり、「想」も明確化していくのである。

第四の条件は、「学びの関係づくり」である。授業の導入段階においても、まとめの段階においても、これが重要な役割を果たす。この「学びの関係」が成立していないと、一行も書かないという生徒が現れることになる。また、たとえ書き始めたとしても、まるで他人事のように常識的な答えを述べるだけということになりやすい。とりわけ現代の中・高校生は、傷つけることや傷つけられることを恐れ、論争することを極力避けようとする傾向にある。これを改善していくには、自己開示と他者理解を意図した学習活動を積極的に取り入れていくことが必要となる。インタビューや構成的グループエンカウターのエクササイズはその一方法である。なお、この場合も、他者との違いを見るだけでなく、他者との共通点も発見するように導きたい。理解者がいるとわかれば、安心して口を開くことができるのである。

さらに、学習後の整理段階においても、「学びあう関係」の成立に力を注ぎたい。その一つの方法が相互評価である。心ない評価者によって傷つく生徒が出るのではないかという懸念を拭いきれない場合もあるだろうが、その点は生徒を信じた方がよいようだ。甘い点を付ける生徒と辛い点を付ける生徒とがいて、適度にバランスが取れるものである。むしろ、お互いの作品を読みあうことによって、自分にはない発想や表現を発見し、相互理解や相互尊敬を深めていくものである。生徒たちが抵抗感を覚えているようであれば、匿名やペンネームを認めてもよい。読み取り感じ取ったことを伝えあうことによって、表現した喜びや達成感が味わえるのである。

第五の条件は、「準備段階からの生徒参加」である。教師が入念に準備することは当然のことであるが、熱心で几帳面な教師ほど、かえって生徒から学びの場を奪ってしまうという落とし穴に陥りやすい。大きな主題（テーマ）は教師が与えるけれども、追究のプロセスは生徒自身の手で行うように進めなければならない。例えば、テーマの絞り込み、視点の選択、「枠組み表現」の抽出、文章構成パターンや書き出し文の類型などについて、教師の側からは、複数のモデルを

提示または暗示するにとどめ、その選択と応用は生徒の手に委ねるのである。

以上の条件は、①表現の前提となる「場」の設定、②「想」発見の支援、③「形」習得の支援、④人間関係づくり、⑤学習過程の工夫、の五観点から整理したものである。

あらゆる学習に共通することだが、人から聞かされたことはなかなか定着しないけれども、自分で発見したことは忘れないものである。作文は、まさに自分で発見し、自分で組み立てていく学習である。取り組み始めの段階では手間や時間がかかると敬遠されがちであるが、授業が活性化してくれば、他の領域の学習とは比べものにならないほど、生徒が学びの主体となって取り組むものである。以上の五条件に留意しながら、さらに授業改善を図っていきたい。

## 注

- (1) 小田迪夫「寺田寅彦のインベンション」『大阪教育大学紀要第V部門』第24巻3号、1975年
- (2) 拙著『発見を導く表現指導』右文書院、1998年
- (3) 拙稿「構想メモの作成と展開」『実践国語研究』第244号、明治図書、2003年7月
- (4) 拙稿「作文指導の未来」『言文』第52号、福島大学国語教育文化学会、2005年3月
- (5) 中洩正堯・国語論究の会『表現する高校生—対話をめざす教室から』三省堂、2003年
- (6) 澤田英史「枠組み指定作文の試み」『月刊国語教育』第174号、東京法令出版、1995年12月
- (7) 村松賢一『いま求められるコミュニケーション能力』明治図書、1998年
- (8) G・パイク、D・セルビー共著、中川喜代子監訳、平岡昌樹訳『ヒューマン・ライツ』明石書店、1993年  
／國分久子・片野智治編『エンカウンターで学級が変わる 中学校編Part 2』図書文化、1997年
- (9) 野矢茂樹『新版 論理トレーニング』（産業図書、2006年）を参照し、一部修正した。
- (10) 五十嵐力『新文章講話』早稲田大学出版部、1909年
- (11) 大西道雄『意見文指導の研究』溪水社、1990年

## 参考文献

- ・佐々政一『中学作文講話』明治書院、1917年
- ・大村はま『大村はま国語教室第5巻』『同第6巻』筑摩書房、1983年
- ・兵庫県高等学校教育研究会国語部会編『自己をひらく表現指導』右文書院、1995年
- ・中西一弘『子どもとともに学ぶ作文指導の課題と方法』明治図書、1996年
- ・大西道雄『作文教育における創構指導の研究』溪水社、1997年
- ・野地潤家『野地潤家著作選集第8巻』『同第9巻』明治図書、1998年
- ・野矢茂樹『論理トレーニング101題』産業図書、2001年
- ・府川源一郎・高木まさき他『認識力を育てる「書き換え」学習—中学校・高校編—』東洋館出版社、2004年
- ・塚田泰彦『国語教室のマッピング』教育出版、2005年
- ・文部科学省『読解力向上に関する指導資料』東洋館出版社、2006年
- ・井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—〈増補新版〉』明治図書、2007年
- ・Mバレ他著／北川達夫他訳・編『フィンランド国語教科書小学5年生』経済界、2007年